

## はじめに

教育学部教育改善委員会委員長 上谷 順三郎

本年度の教育学部教育改善委員会の活動についてその概略を記します。なお、特筆すべき取組や改善事例については本報告書の本文に下線を施して強調しています。

授業アンケートは、対面授業中心へと変わったことによって、どのような効果があったのか、あるいはどのような影響があったのかについて、次年度も引き続き検討する必要があると思われます。それは特に、学習時間の減少傾向が見て取れるからです。アンケート回答率の向上を図ることと合わせて、各授業のシラバスの見直しやそれぞれの授業における独自の質問項目の作成などについても委員会を中心に検討していきたいと思ひます。

授業紹介・参観では、今年度後期より4年ぶりに授業参観を再開しました。授業紹介では、授業形態ごとに「授業準備」「授業運営」「成績評価」「授業時間外学習の支援」「その他」の回答内容を継続して行ってきましたが、今後の授業参観の実施に向けて、この4年間の取り組みを振り返り、授業評価方法の改善に生かしていきたいと思ひます。

教育学研究科においては、令和3年4月に募集停止となった教育実践総合専攻（修士課程）から平成29年度開設の学校教育実践高度化専攻（教職大学院）へと令和6年度から一本化されます。この間、教職大学院では定期的にFDアンケート・授業リフレクション・授業参観・教育相談day等を行い、毎月これらの活動について教員会議で情報共有しています。昨年度は教職大学院の教員がベストティーチャー賞候補として全学へ推薦されました。

学生FD委員会は、昨年度に引き続き学生交流イベント（ソフトバレー大会）を開催することができました。参加人数は178名でした（昨年は154名）。学部・学科内はもちろん他のコースの学生や後輩たちと交流する機会となったとのことで次年度への参加意欲も高まったようです。学生FDシンポジウムでは、昨年度に引き続き学部の関係委員会委員長の先生方と事務職員にご出席いただき、密度の濃い意見交換を行うことができました。また例年通り、ピアサポートとして『履修登録のすすめ』の新年度版を作成しました。

FD講演会では、「各専門分野の特質を基盤とした教育学部ならではの学習機会の提供」をテーマに掲げ、教育学部ベストティーチャー賞受賞者2名（片岡美華先生、浅野陽樹先生）の講演をもとに意見交換を行いました。知識の獲得を超えた、専門的な見識や身体化した専門性を追究した学習の提供、多様な評価方法など、教員養成に携わる教員が共有し理解し合う貴重な機会となったと思ひます。次年度以降のテーマや講師選定についても意見交換が行われました。

教育改善セミナーでは、本委員会の諸活動を振り返り、次年度へ引き継ぐための場を設定しました。各活動報告とその内容をめぐっての意見交換を時間いっぱい行いましたが、今回は特に学生FD委員会シンポジウム担当の学生にも報告していただき、学部長他、関係委員会委員長から現状の説明と今後の予定を話していただきました。こうして、学生FD委員会と本委員会の活動を取り上げることで次年度の活動計画や検討課題を整理することができました。

「教育の内部質保証に関する実施要項」との関連としては、自己点検・評価のために、「学生FD委員会シンポジウム」と「教育改善セミナー」を軸として、学生と教職員の意見交換の場を設け、その内容を本報告書の関連箇所に記載し、次年度の課題として整理しています。

以上、概略を紹介しました。具体的なデータや事例については各章をご覧ください。

## 目次

1章	授業アンケート回答の分析	
1	アンケートの実施方法	1
2	実施状況	2
3	結果	2
2章	授業紹介・授業参観報告	
1	授業紹介・授業参観の実施について	4
2	授業紹介の実施状況	4
3	授業紹介における記述	4
4	授業参観の実施状況	7
5	授業参観における記述	7
6	総括	7
3章	学生FD委員会の活動	
1	学生FD委員会の活動概要	8
2	活動と振り返り	8
3	今年度の成果と今後の課題	11
4章	教育学部FD講演会	12
5章	教育改善セミナー	
1	開催の趣旨	16
2	セミナーの概要	16
6章	令和5年度専任教員のFD参加率	20
7章	大学IRコンソーシアム学生調査結果（令和4年度実施分）の分析について	21
	編集後記	23

## 1章 授業アンケート回答の分析

### 1. アンケート実施方法

令和5年度前後期の授業アンケートを以下の要領で実施した。

- 実施時期：前期 令和5年7月10日（月）～8月9日（水）  
後期 令和6年1月17日（水）～2月9日（金）
- 実施科目：事前調査で各教員が開講する授業科目から1つ以上を選択。回答がなかった場合は、委員会で1科目を指定した。
- 実施手段：manabaによるオンライン回答
- 質問項目：Q1～Q11の11項目。Q1およびQ11以外は4件法（1. そう思う, 2. だいたいそう思う, 3. あまりそう思わない, 4. そう思わない）による回答。  
Q1 【学習時間】この授業に関して、あなたは毎週平均してどのくらい学習をしましたか。予習、復習課題、掲示板を読むなど、すべてを合わせた時間で回答してください。  
Q2 【主体性】あなたはこの授業に主体的に取り組むことができましたか。  
Q3 【理解度】あなたはこの授業の内容を十分に理解することができましたか。  
Q4 【シラバス内容】この授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか。  
Q5 【シラバス目標】シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか。  
Q6 【説明】教員の説明は分かりやすかったですか。  
Q7 【興味関心】この授業は、あなたの興味・関心を高めるものでしたか。  
Q8 【資料】資料（板書、スライド、講義動画、配布資料等）は授業の理解を助けるものでしたか。  
Q9 【質問】この授業は質問がしやすい雰囲気でしたか（メールやmanaba上での質問等を含む）。  
Q10 【満足度】この授業は全般的にみて満足するものでしたか。  
Q11 【自由記述】この授業の良かった点や感想等を自由に書いて下さい。

前後期の平均スコアを表1に示す。

表1 令和5年度授業アンケートの平均スコア

	前期	後期		前期	後期
Q2	1.5	1.5	Q7	1.4	1.4
Q3	1.6	1.7	Q8	1.4	1.4
Q4	1.4	1.4	Q9	1.6	1.5
Q5	1.6	1.6	Q10	1.4	1.4
Q6	1.4	1.4			

- フィードバック:担当教員によるアンケート結果についての振り返りをmanabaで公開した。

## 2. 実施状況

令和5年度の授業アンケートと教員によるフィードバックの実施状況を表2に示す。授業アンケートの回答率は、令和4年度と比べて数値が悪化している。また、アンケート回答率は、100%に近い授業もあれば、ほとんど回答者のいない授業もある。授業アンケートを行う際に、授業中にアンケートがあることを学生に周知したり、授業中にアンケートに解答する時間を設けたりするなどの工夫が必要であろう。

フィードバック率も、今年度は令和4年度と比較して、若干数値が改善している。ただ、フィードバックの目的や、どのような内容を書くべきかわからない、という意見もあるので、今後はフィードバックの意義なども含めて教員に周知することが必要であると考えられる。

表2 授業アンケートとフィードバックの実施状況

	R5 後期	R5 前期	R4 後期	R4 前期
実施科目数	72	75	79	78
履修登録者数	3301	3015	2969	3164
回答者数	1408	1334	1349	1574
回答率	43%	44%	45%	50%
フィードバック数	28	32	30	29
実施率	39%	43%	38%	37.1%

## 3. 結果

授業アンケートの Q1(学習時間)については、授業時間外での学習時間を1. 5時間以上、2. 4から5時間程度、3. 3から4時間程度、4. 2から3時間程度、5. 1時間から2時間程度、6. 1時間以下、により回答してもらった。前年度からの平均スコアの推移を表3に示す。

前年に引き続き、学習時間が減少傾向にあることが見て取れる。Q1の学習時間には、掲示板やmanabaを見る時間も含むので、ほとんどの授業が対面授業になった結果、課題や予習復習以外の時間が減少した結果だと考えられる。しかし現状では、授業時間外での学習時間を十分に確保できているとは言い難い。また、アンケート回答率と並び、この項目は授業によって回答結果の差が大きい項目である。授業の内容によってはあまり気にする必要がない場合もあると思われるが、担当教員が各授業に必要な学習時間を明確にし、その実現を助けるような工夫が求められるだろう。

表3 Q1【学習時間】の平均スコアの推移

	R5 後期	R5 前期	R4 後期	R4 前期
Q1	5.0	4.9	4.9	4.9

その他の質問項目について、前年度と比較したものを表4に示す。前年度と比較して、Q4のシラバスに沿った授業だったかどうかに関する項目が前年に比較して数値が悪化しており、自由記述欄にもシラバスと異なる授業に戸惑っている旨の記述が例年に比べて多かった。シラバスシステムの変更により、シラバスの修正がうまくできなかった影響ではないかと考えられる。その他の項目に関しては、前年度と比べて特筆すべき変化は見られなかった。

表 4 Q2 ～ Q10 平均スコアの推移

	R5 後期	R5 前期	R4 後期	R4 前期
Q2	1.5	1.5	1.5	1.5
Q3	1.7	1.6	1.6	1.6
Q4	1.4	1.4	1.3	1.3
Q5	1.6	1.6	1.6	1.7
Q6	1.4	1.4	1.4	1.4
Q7	1.4	1.4	1.4	1.4
Q8	1.4	1.4	1.4	1.4
Q9	1.5	1.6	1.5	1.5
Q10	1.4	1.4	1.4	1.4

## 2章 授業紹介・授業参観報告

### 1. 授業紹介・授業参観の実施について

#### (1) 授業紹介・授業参観の目的と枠組み

本学部教育改善委員会では、例年「教員相互による授業参観」を実施してきた。また授業紹介とは、教育学部専任・特任教員が自分の担当する教育学部開講の授業科目から、各教員が自身の担当科目1科目を選択し、「授業準備」「授業運営」「成績評価」「授業時間外学習の支援」について、実施方法・工夫・課題等の記入及び提出を求めるものである。

#### (2) 授業紹介の実施

教授会での周知を図った後、前期7月28日（金）～8月23日（水）の期間実施した。

### 2. 授業紹介の実施状況

本年度前期教育学部教員からの報告件数は、10件である。出された報告書に基づき、本年度前期に実施した授業紹介について報告する。

### 3. 授業紹介における記述

本年度は殆ど対面授業であった。各授業の工夫した点などについて、前期回答の一部を抜粋し紹介する。

#### (1) 授業準備

##### 授業担当者の工夫・授業アンケートの活用、manabaによる資料の事前提供等

- ・事前にテキスト資料に加え画像資料や授業内容に関連するオプションの話題、ウェブサイト等も準備・活用した。
- ・教員志望学生が漢文学及び日本文学への理解を深められるように、今学期授業を組み立てたり、受講生の興味に応じて見学先を選定した。
- ・受講生が分かり易いように過去の実施例を映像等で紹介したり、先輩学生が後輩受講者のサポート等で協力したり、小中等両課程の学生が理解可能なように講義内容を精選した。受講生の中に公開授業者も多かったので、機器は使用せず対面授業を行った。
- ・本授業では学習指導案に関する課題を課しているが、昨年度アンケート意見に基づき提出サイクルを見直し、授業計画全体を修正した。manabaのニュースを用い、毎回授業形態（対面、遠隔）アナウンスと課題（小テスト及びレポート）を紹介した。
- ・授業資料はコースコンテンツと紙媒体両方で準備した。毎回授業のスライドを作成し、授業前までにmanabaで公開した。

#### (2) 授業運営

- ・前回授業内容を確認したり、気軽に意見交流もしやすい環境を作った。
- ・教材研究と学習指導案作成や模擬授業の実施・協議と関連付けることにより実践力育成を目指した。受講生が提出した学習指導案は添削し、改善事項をフィードバックした。
- ・次回授業で扱う内容について課題を設定し、ミニレポートを作成させた。

- ・授業内容と関係ある雑談で受講生との距離を縮めたり、各回授業のファシリテーター学生に授業企画・運営・ふりかえりを担当させ、授業サポートと介入の役割を担わせた。
- ・授業初回到授業内容と中学校学習指導要領、シラバス、毎回授業時に学習指導要領に対応する課題を提示し、次週までに提出させている。
- ・すべて対面で授業し、機器は使用せず全て板書で講義した。また実習を多く取り入れたり、受講人数よりも少し広めの教室を確保し、毎回質問用紙を配布して授業終了時に質問を出させ、次の授業初めに提出された全ての質問に回答した。

### (3) 成績評価

#### ① manaba の活用

- ・小テストを 40%評価、確認試験を 60%評価とし、小テストは manaba の自動採点システムを用いた。
- ・授業で扱ったことから学期末課題を manaba で出題し、その記述内容により評価した。

#### ② 評価方法の工夫

- ・レポート提出の形式をとり、基本的書式や文献引用のルールは厳格に守らせたが、書く内容に関しては授業時の解釈と異なる解釈でも構わないことをいつも伝えた。
- ・複数回のレポート(学中指導要領の作成)によって成績を評価した。
- ・期末レポートを課し、講義全体から学生が理解した内容を確認しながら評価した。
- ・全授業回数の 3分の1 を超えて欠席する者は評価対象から除いている。出席店はなく、期日内に提出された課題(合計 30 点)と確認テスト(70 点)の合計と授業に取り組む姿勢(manaba の閲覧状態も含む)を総合して成績を評価している。なお感染症罹患や実習参加等の理由により止むを得ず欠席する者に対しては代替措置を講じて、評価に不平等が生じないようにしている。
- ・輪番制で担当する授業のデザインと自分たちが実施した授業のリフレクションの深さ・15 回の演習各回の論考内容を記憶するミニポーとフォリオを成績評価の対象とし、担当授業当日の授業の巧拙や成否は成績評価の対象とはしなかった。
- ・講義前半の授業内容と後半の授業内容に分けて確認テストを行い、成績を評価する予定であった。講義前半の授業内容に関する確認テストは実施できたが、講義後半の授業内容に関する確認テストは台風の影響で実施できなかったため、レポートに変更して成績を評価した。

### (4) 授業時間外学習の支援

#### 支援の工夫

- ・授業前に manaba のコンテンツに課題史料を載せ、授業後は授業内容に即した小テストやレポートを課題として与えることで授業の予習と復習を促した。
- ・テキストに関連した他の小説や詩、映像作品展・歴史的イベントや各国の社会事情に関わる資料の紹介をし、普段から海外への関心を向けられるような様々な情報を提供した。
- ・授業運営や成績評価でも報告したように、この授業では教材研究や学習指導案の作成が中心になったため、学習指導案作成の参考とするように学習指導要領解説の関連する頁を配

布資料に明記し、教材研究の際には学校で使用されている教科書と対応させながら、解説の記述の意味を理解できるように配慮し、関連する理論も極力取り上げた。

- ・より深い教材研究ができるように、教材によっては複数の教科書のコピーを配布し、比較検討できるようにした。
- ・各種工具書、参考書について案内したほか、国語科資料室に関連図書をまとめた一角を準備した。
- ・毎回の授業で提示する到達目標に対応する課題を出している。毎回の manaba のコースニュースでは、スライドと関係資料に加えて、教科書として指定している「二訂版ニュースステージ地学図表」の対応頁を示しているので、受講生はこれらを参考にして課題に取り組むことができ、更に初回に配布する参考図書等に目を通すことによって内容の理解を深めることができる。
- ・学生自身が自分たちの 90 分の学習をデザインし、実際にファシリテートする授業のため、各回輪番制で担当となる学生の希望に応じて平均 1.5 時間、最大 5 時間程度の打ち合わせを授業準備として時間外に行った。その打ち合わせの際に、学生たち自身で理解を深めることができるよう追加の資料や教材を精選し、必要に応じて担当学生に紹介し、自分たちにその使用の有無を選択してもらった。その結果、学生たちは平均 6 時間、多い者で 20 時間ほどの自信が担当する授業の時間の学習に取り組んだ。
- ・学生が班ごとにおこなう模擬授業では、早い段階で教員と相談する時間を設けるなどして、授業時間外でどのような準備をすればよいかイメージが湧くよう支援をおこなった。
- ・オフィスアワーを設定した。また教育学部学生については、manaba を使って連絡をした。

#### (5) 今後の課題

- ・演習の開設を模範解答や動画等で行ったり、講義終了後 manaba に提示した講義ノートを毎回ダウンロードして復習するように促した。

#### (6) その他

- ・本年度の授業では、授業アンケートの結果を踏まえパワーポイントを利用した。今後パワーポイント内容の充実や改善を図りたい。
- ・本年度は、ハイブリッド寄りの対面形式で行った。対面のほうが学生とのコミュニケーションがとりやすい。
- ・学習指導要領に記載されている内容に加え、その背景も取り扱っている。
- ・受講生が授業中入ることができる教室の中で、動かしやすい個別机とイスが整備されている教室の数が限られており、できる限り学習環境のデザインに担当学生らが自由に・多様にこだわるよう・教室を 2 教室確保した。
- ・ある意味特殊な内容を取り扱った授業内容であったために、また受講生の中に公開授業社会人の方が多かったので、説明は極力丁寧にした。授業資料は毎回準備したが、その内容説明については授業資料を読むことを避け、授業資料の内容を整理・要約し、背景説明を入れて分かり易い説明になるように極力注意した。



#### 4. 授業参観の実施状況

後期授業参観は、2024年1月22日(月)～2月2日(金)の期間に行われ、授業参観報告書の提出期限は2月8日(木)であった。授業参観報告書を提出した教員は、4人であった。出された報告書に基づき、本年度後期の授業参観につき報告する。

#### 5. 授業参観における記述

##### (1) 授業運営

- ・授業最初にレジメと関係資料が配布され、その後パワーポイントを使い、双方向授業が行われた、最新の裁判例や鹿児島市の動向を挙げ、わかりやすく解説がされていた、課題曲が、受講生の技量に合わせて与えられ、課題曲を練習し、最終評価を受ける授業であった。
- ・他学科学生も履修し、苦慮していた。授業担当者は、一人一人に声かけ、アドバイス、激励し、改善すべき点を丁寧に指導していた。授業担当者は、同一授業中異なるレベルの受講生の力量や課題点を正確に把握し、迅速かつ適切に指導していた。
- ・学生に平仮名点画一覧表を示して、各平仮名を平仮名点画十要素(とめ、はね、はらい、よこ、たて、ななめ、てん、おれ、まがり、むすび)に分類させて、学生の平仮名に対する理解を深めさせていた、平仮名点画十要素を2、3、4種類含む字を示した上で小学生に点画種類数の多い平仮名を学ばせるために、点画数種類の多い平仮名を組み合わせで2、3、4字教材を作る課題が出された。授業終了時出席カードを提出させ、出席確認と質問を拾っていた。

##### (2) 成績評価

- ・課題曲が、予め受講生の技能に合わせて数段階レベルで与えられ、与えられた課題曲を練習し最終評価を受ける授業であった。事前に受講生に今期の成績評価について説明され、伝えられ、納得して帰るのが印象的であった。
- ・確認試験時、普段の小テスト(10回)未受験分追試日時について分かり易く周知されていた。

##### (3) 今後の課題

- ・手書き計算方式がPCやタブレット、キーボード入力に変わる可能性やその影響、授業受講生の変化、高校までの電卓使用の影響、社会や学習指導要領変化による代数・幾何の位置づけ変化、その結果代数学への興味・関心や学力変化、算数数学教育と代数学との関係、本授業(線型代数学Ⅱ)教科書と線型代数学Ⅰ教科書との関係等。

##### (4) その他

- ・授業開始前の学生着席、90分の確認試験解答時間中、解答用紙・計算用紙の必要枚数使用、静かに集中した解答への取り組み。

#### 6. 総括

今年度前期授業紹介、後期授業参観を実施した。授業紹介・授業参観何れも教員の授業方法改善の上で大きな役割を果たし、後期授業参観を実施できた意義は大きい。報告書には、授業運営方法や成績評価、課題等が記載され、今後授業参観継続への手ごたえを感じさせた。

### 3章 学生FD委員会の活動

#### 1. 学生FD委員会の活動概要

学生FD委員会は、本学部の授業や教育の改善を目的としてFD活動を担う学生主体の組織であり、26名の学生委員から構成されている。FD委員会の具体的な活動としては、全国学生FDサミットへの参加や学部シンポジウムの企画・実施、学生交流イベントの運営、履修支援等のピアサポート活動などを行っている。

今年度のFD委員会は、前年度同様に全国学生FDサミットが開催されなかったため参加することは叶わなかったが、学部シンポジウム・学生交流イベントの開催、ピアサポート活動の一環として新入生への配布を予定している『履修登録のすすめ』を作成することができた。

#### 2. 活動と振り返り

##### (1) 学生交流イベント

近年、新型コロナウイルスの影響により学生生活に制限がかけられ、人と人との交流の機会が少なくなってしまう状況があった。そこで、学年や学科を超えた学部内での交流の場を設けることによって、学生間で近況や悩み等を共有し、つながりを深め、よりよい学生生活を送ることができるようにすることを目的とし、学生交流イベント「教育学部ソフトバレーボール大会」を企画・実施した。11月23日(木・祝)10時から開催し、参加者数は178名となった。大会では、同学年や学科内だけではなく、他学年や他学科を応援する姿も見られ、参加者からは「学科、学部内で新たな交流が生まれた」「他コースの学生や後輩たちと交流できた」などの声が寄せられた。また、来年度のイベント活動にも参加したいという声も多数寄せられた。今年度は、参加賞や景品を新たに設けたため、参加者の満足度や学生生活の向上に一層つなげることができた。



## (2) FDシンポジウム

2024年1月23日(火)16時10分より教育学部第二講義棟講義室Bにて、学生FD委員会シンポジウム班主催のFD委員会シンポジウムを開催した。「充実した大学生活のために ―コロナ禍を経て見えてきた問題―」というテーマのもと、コロナ禍を経て見えてきた問題と学生が今後どのようにそれらと向き合っていくかを考える機会となった。シンポジウムを開催するにあたり、学生が大学生活や実習等でどのような難しさ、困難さを抱えているかを



把握するため、事前に教育学部の在学学生を対象としてアンケート調査を実施した。FDシンポジウム当日は、アンケート結果の報告と、その得られた結果をもとに、教育学部関係委員会委員長の先生方をはじめとした学部教職員と学生がグループディスカッションを行い、活発な意見交換を行った。以下はアンケート結果の抜粋である。

### 【2023年度学生FD委員会アンケートについての報告】

回答者：159名（1年生60名、2年生46名、3年生37名、4年生16名）

2-1 履修について困っていることはありますか。

・ある 57.9% ・ない 42.1%

2-2 あると回答した方にお聞きします。困っていることとは、どのようなことですか。

・履修したい科目が被っていて、必要単位を取ることができない 46.2% ・単位をすべて取りきることができるかが分からない 43% ・人数制限科目が多く、単位を取ることができない 43% ・何を履修すればいいのかが分からない 38.7% ・人数制限科目に応募した記録が残らない 5.4%

(上記5つはアンケート作成側で項目を用意。その他自由記述あり)

3-1 学部内施設の授業外の利用頻度はどのくらいですか。(ALP、理系棟、文系棟、講義室、体育館、音美棟、学食等)

・ほぼ毎日 51.6% ・週に2.3回程度 34.6% ・週に1回 11.3% ・全く利用しない 2.5%

3-2 学部内の施設利用時に困っていることはありますか。

・ある 31.4% ・ない 68.6%

3-3 あると回答した方にお聞きします。具体的にどのようなことに困っているかを教えてください。

多かった意見

Wi-Fiの接続について/個別ブースや個人デスクの設置について/エデュカの営業時間の延長/学食メニューの固定化/コンセントを増やしてほしい

4-1 これまで、実習等で困ったこと(不満な点)はありましたか。

・ある 29.6% ・ない 70.4%

4-2 あると回答した方にお聞きします。どのようなことに困りましたか(不満を持ちましたか)。

多かった意見

交通費の負担について/実習先の選択について

5-1 学科内または学部内(学科同士など)の交流は必要だと思いますか。

・はい 96.2% ・いいえ 3.8%

5-2 それはなぜですか(具体的に記述をお願いします)。

多かった意見

〈必要なし〉 必要性を感じない

〈必要あり〉 情報交換ができる/助け合うことができる/協働や連携の関係ができる/異なる視点を得ることができる/友人が増える

5-3 学科内の交流について、あなたの学科では何か取り組みがなされていますか。(定期のお菓子パーティーや旅行等)

・ある 39.6% ・ない 60.4%

5-4 あると回答した方にお聞きします。どのような取り組みがなされていますか。

挙げられた回答

忘年会/レクリエーション/社会科運動会や交流パーティー、忘年会など/ゼミ合宿/ご飯会/新歓、打ち上げなど/球技練習/お菓子パーティー・飲み会・旅行・ソフトバレー交流会/定期で昼食会が開催されている/旅行、遊び等/バーベキュー/学科分けがおわってからの交流会/たこ焼き/夏に教授や学部長を交えた食事会

5-5 その取り組みによってどのような効果があると感じていますか。

・多くの人が仲の深まりを実感

5-6 学部内の交流(学科を超えた交流)について、あなたの学科、または本学では何か取り組みがなされていますか。

・ある 27.7% ・ない 72.3%

5-7 あると回答した方にお聞きします。どのような取り組みがされていますか。

・学生FD主催のバレーボール大会 等

5-8 その取り組みによってどのような効果があると感じていますか。

・交流の深まり、広がりを実感

#### 【当日のディスカッションで出された意見】

##### ①履修

教育学部は教員免許を取る関係から単位の取得が複雑なため、視覚的にわかりやすい表などで示してほしい/学科毎にカリキュラム担当の先生がおり、相談できることを学生に周知してほしい/人数制限のある科目を取りやすくしてほしい/教育課程をどこでも見られるようにしてほしい(冊子だけでなくPDFも)/これまでの修得単位が卒業要件の単位にどれくらい満たされているかをネットで確認できるようにしてほしい

##### ②施設利用

Wi-Fi 環境を整備してほしい/理系棟以外にも個別で学習できるスペースをつくってほしい/第二講義棟を学生が使用できることについて周知してほしい/生協の営業時間の延長してほしい

### ③教育実習

参加観察実習生が先輩の授業を見る機会をつくってほしい／実習日誌の分量とオリエンテーションの頻度を検討してほしい／実習校配属に関して出身校の人への配慮をしてほしい／実習校によって交通費の負担があることへの配慮をしてほしい

### ④学科内・学科同士の交流

大学施設の空き教室などを活用し、各学科の学生が交流できる場所があるとよい／期末テストの終わりや年末などのタイミングで学生が交流できるイベントを開催する

また、2024年2月21日（水）に開催された教育改善セミナーにおいては、学生FD委員会からシンポジウム班リーダーの学生委員が出席し、FDシンポジウムでディスカッションされた内容について発表した。セミナーでは、FDシンポジウムにおいて検討された課題について、回答をいただく機会ともなった。

### (3) ピアサポート

昨年度に作成した新入生対象の履修支援冊子『履修登録のすすめ』を、次年度の教育課程に合わせて改訂した。また、前年度の内容を引き継ぎ、新入生だけではなく2年生以上も相談できる窓口を、学生が気軽にアクセスできるLINEアプリを使って開設し、各学科のFD委員が実習や履修に関する質問を受け付けられるような体制を継続した。

### 3. 今年度の成果と今後の課題

今年度は、コロナ禍以前の状態で概ね活動を実施することができた。11月の学生交流イベント・ソフトバレーボール大会では、教育学部の多くの学生が参加し、学科や学年を超えた人とのつながりを実感するイベントとなり、次年度も開催を期待する声が数多く寄せられた。また、1月のFDシンポジウムでは、事前に学部学生へ実施したアンケート結果を基に「履修」「教育実習」「施設利用」などの視点を設け、学生と教職員がグループディスカッションを行い、活発な議論が交わされた。

最後になるが、学生FD委員会の認知度は在学生の中でも高くないため、今後は学生FD委員会がどのような活動を行っているのか、在学生や教職員、大学全体へ広報し一層推進していくことが今後の課題になっていくのだろう。



## 4章 教育学部FD講演会

2023年9月27日にFD講演会を開催した。概要は以下の通りである。

テーマ：「各専門分野の特質を基盤とした教育学部ならではの学習機会の提供」

講演者：鹿児島大学 教育学部 片岡美華（障害児教育）

鹿児島大学 教育学部 浅野陽樹（技術教育）

ファシリテーター：鹿児島大学 教育学部 高谷哲也

開催日時：2023年9月27日（水）14時30分～16時00分

会場：教育学部第1講義棟 101教室

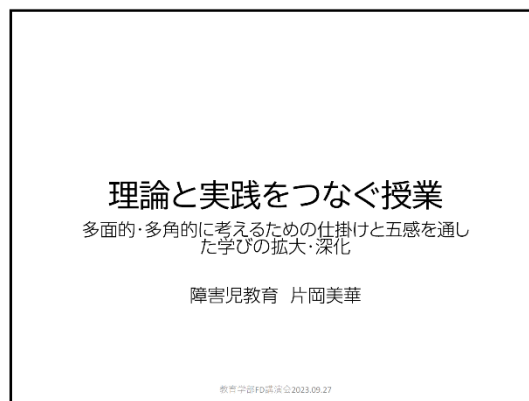
本講演会は、2名の教育学部教員の講演をもとに、「各専門分野の特質を基盤とした教育学部ならではの学習機会の提供」をテーマに、各専門分野において大切にされている学生の学習機会について知り合い、教育学部ならではの学習機会の提供について共に考える機会として開催した。

片岡先生の講演では、自身の講義内で特別支援教育について初めて学ぶ学生が有しているイメージや動機の実態について紹介があり、学生に学んでもらいたいと考えていることと、そのために具体的に行っている授業内の工夫について紹介がなされた。その中で、「4年という限りある期間で教えられることは何だろうか」という問いのもと、自身が実践上重視しているものとして「調べる力」「活用力」「アレンジ力」が提示された。そこでは、「教える私自身も、4年間

ではちょっと厳しいな難しいなと感じています」との率直な実感が語られ、「わからないことは必ず出てくる。そのときに調べられること。学んだ事をとりあえずやってみる活用力というものが大事だと思っている」との思いが紹介された。そして、「できれば応用したり、習ったことを別の子にアレンジしたりする力も発展的につけたいなあとは思っているんですけども、その活用方法というのがすごく難しいんじゃないかなと思っています。」と実感が語られた。

その後、担当授業と実習の関係について紹介があり、障害の早期発見に繋がる点や専門性の点からも重要だと考えていることとして、しっかりと子どもの見取りができるようになることが目指されていることが語られた。また、授業での工夫については、ユニバーサルデザイン教育について具体的に取りあげているため、UDフォントの利用、複数回での評価実施、課題提出の期限の緩やかな設定など、自身の授業でも実際に実践していることが紹介された。それらは、様々な学生の実態やニーズに応じることが可能となる授業デザインとしての具体的な工夫であった。講演後半では、担当科目ごとに具体的にどのような実践が行われているかが続いて紹介された。

片岡先生からは、自身の工夫や実践の中で、学生の変化が具体的に確認されることが自分自身にとっても楽しいと語られた。そしてまとめでは、今回の講演をきっかけに、自分の授業で何に気をつけて授業をしているかを改めて振り返ったところ、「多面的・多角的に考えるための仕掛け」をつくることと、「五感を通した学び」とまとめられると表現された。相手の立場にたって考える



ことは難しいと思うため、あえてそのような状況を仕掛けており、ロールプレイや模擬授業、疑似体験等を通して、学生自身が自ら課題を見いだしていくことを目指していると説明された。

質疑応答交流では、講演内で使用された用語やUI フォントについての確認の質問があり、応答がなされた。また、模擬授業の際に、子どもや保護者が言いそうにはないことを学生が言ってしまうなど、担っている役割になりきれないケースがあると考えられるが、どのような工夫がされているかについてやりとりがなされ、基礎的な知識の獲得を経た後に履修できるようにしていたり、なりきれなくてもまずやってみて気づいていたり、他の実習経験等も経て演じられるようになっていたりする機会にしていることが紹介された。

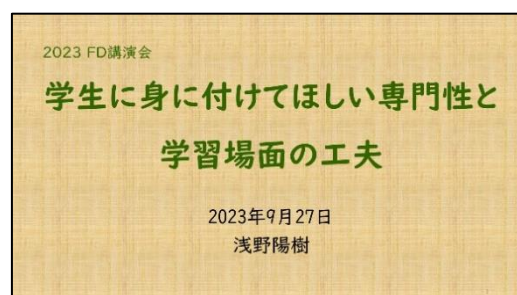


浅野先生の講演では、学生に身に付けてほしい専門性と目指す学生の姿、そのための学習機会の提供方法、講義の評価について紹介がなされた。身に付けてほしい専門性については、理論とその活用力について具体的な説明がなされた。そこでは、理論を学んでから活用するまでに時間があった際に両者がつながらない問題がみられることが説明され、理論として学ぶ事と、活用する機会との接続を重視していることが紹介された。また、「自ら学ぼうとするマインド」を身につけてもらいたいという思いがあることも語られた。

知識・理解については、「必要感～何を、なぜ学ぶのか～」が得られることを重視しており、学生に対して様々な事象を紹介するなどして実現を目指していることが紹介された。また、「全体像を見渡す」ことの重要性も説明され、学ぶ内容がストーリー性も含めて整理されたA3判の学習内容の構造図が紹介された。

学び方としては、知識・理解の側面についてはまず自身が教え、その理解度を学生同士で確認し、応用問題に取り組んでみるという授業展開をとっていることが紹介された。知識・理解については、学生自身でもできるため、manabaのドリル問題を準備するなど、自分でできることにはできる限り講義外で取り組んでもらえるよう工夫がなされている。それは学生にとっては定着の機会ともなっており、教員側では各学生の定着の度合いを確認する機会にもなっていることが説明された。

また、理解の確認の手立てとしては、教員が説明した内容を学生同士で説明しあう機会が設定されており、そのうえで、知識の活用機会として、知識を活用する問題を学生同士で考えたり、

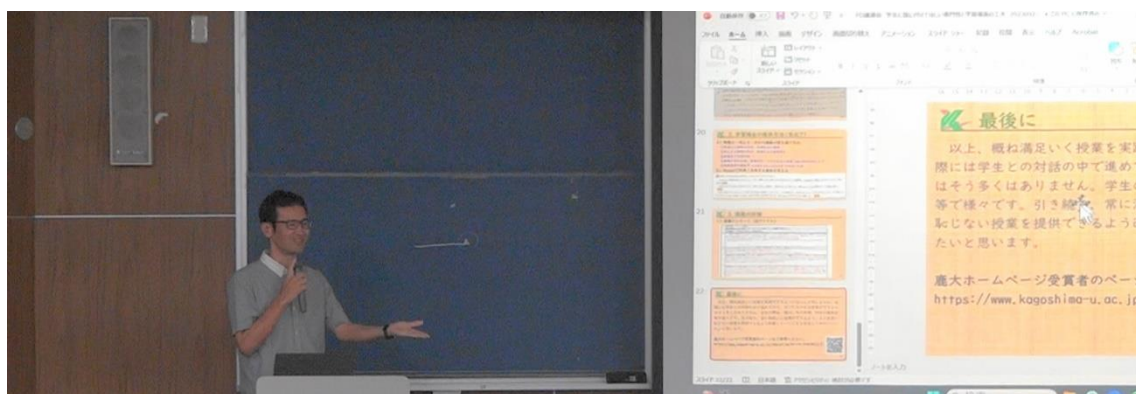


実際に栽培などの実践に取り組んだりすることが行われていることが紹介された。

講義の評価については、授業アンケートから、「授業内容を説明するだけでなく、問いを投げかけて考えさせることも行っていたので、より理解力を高めることができた」「自分の生活の中で行動が変わっています」といった記述が自由記述から確認されていることが紹介された。そしてそれが自身の励みにもなっていることが語られた。試験については、すぐに確認してもらいたいため、試験直後に解答例を配付していることと、活用問題は学生にとって難しい実態があることが紹介された。

加えて、受講生の行動等を分析的に見て考察することに取り組んでいることが紹介され、それを受講生にフィードバックしたり、附属小学校・田上小学校での公開研究会や他の大学教員との共同や学習を通して自分が変容したことや思ったこと、学んだことなども学生に紹介したりすることで、学生にとって学びが自分事になっていくことも紹介された。また、学生に自らの学びを振り返り成長を自覚してもらえる機会の提供も行われている。その中では、講義の学びの中での自身の経験について、どのような感情を味わったかという観点での振り返りも学生に行ってもらっており、それを自分の学びの深まりに繋げていってもらっていることなどが具体例として紹介された。

質疑応答交流では、追究されている身体性を通した学びへの共感、教員自身が学んだ事や実感した事も学生に紹介していることの意義、担当科目が扱う範囲の広さ等に関するコメントが寄せられた。また、学生が自身の学びのプロセスを文字化していくことについて、そのプロセスが授業にどのように活きると考えられているかについて質問がなされた。それに対しては、ポートフォリオ的に学びの記録を文字化して残していくと、それをもとに学生が振り返ったり他者と交流したりすることで自分を見つめ、自分の行ったことの分析や意味づけにつながる実感がされているとの回答がなされた。また、学生自身の学び方がどのように変化しているかという実感がされているかについての質問に対しては、その実感は難しいが、自分の分析をしていくと学生の目が変わっていくことは授業者として実感されていると回答された。



講演会の最後には、今回の2名の教員の授業実践上のこだわりや工夫に共通して見いだされたこととして、ファシリテーターが次の3点を整理して提示した。1点目に、将来教員になる学生を対象にしている中で、知識の獲得に留まらない学習の提供が重視されていることである。特に、獲得した専門知と実践をどのように結びつけていくかという点については、単なる実践での理論の活用という意味ではなく、専門的な見識としての獲得や身体化した専門性という意味で追究がなされていた。2点目に、担当している科目の15回の授業ではカバーしきれない「身につけても



らいたい専門性」に対して、どのように軽重をつけて何を優先して15コマの中で実現・具体化しようとしているかが紹介されたことである。そこには各担当教員独自のこだわりがあり、それが卓越した授業実践に結実しているという点で、カリキュラムの標準化が進む現状ではあるが、それが尊重されることの重要性が改めて確認された。3点目に、評価の方法が多様に工夫されていることである。我々が学生に求めていることが多岐にわたっているとすれば、その評価の方法も多様である必要があるとの見解が得られた。

本FD講演会を通して、改めて各教員の授業実践上のこだわりや具体的な実践内容を交流しあう機会の重要性が実感された。目的養成としての教員養成を担う中で、そこに携わる様々な専門性を有した教員が、それぞれ何を軸として実践の開発に取り組んでおり、そこに教員養成に対するどのような思いがあるのかを教員間で互いに知り合い理解し合うことは、教員志望学生にとって価値のある学習機会を学部としてどのように提供していくかを具体的に考えていく前提として、不可欠な機会であると考えられる。

## 5章 教育改善セミナー

### 1. 開催の趣旨

教育学部教育改善委員会の令和5年度の活動を振り返り、教育学部における教育改善状況を確認するとともに、今年度における委員会の取り組みの成果と次年度以降に解決すべき課題を整理することを目的として開催しました。

なお、セミナーにおける各報告についての詳細は、本報告書内の担当委員による報告を参照していただきたいと思えます。

また今回は、教育学部学生FD委員会シンポジウム（令和6年1月23日開催）の報告をシンポジウム担当の学生委員に行っていたいただき、学部長をはじめ、関係する学部委員会委員長からの回答を踏まえた意見交換をすることができました。

### 2. セミナーの概要

【日時】 2024（令和6年）2月21日（水）10:30-12:00

【会場】 教育学部第1講義棟101教室

#### 【次第】

- ・開会の挨拶（上谷順三郎：教育改善委員会委員長・司会）
- ・学部長挨拶（有倉巳幸）
- ・授業アンケート、授業紹介・参観について（有家雄介）
- ・学生FD委員会シンポジウムについて（新田佑夏：教育学領域3年）
- ・FD講演会について（高谷哲也）
- ・各種アンケートについて（上谷順三郎）
- ・教師教育開発センターと教育学部の連携について（有倉巳幸）
- ・セミナーのまとめ（土田理：教育学部附属教育実践総合センター長）

#### （1）学部長挨拶（有倉巳幸）

本セミナー開催の意義として、次の2つを挙げていらっしゃいました。

一つは、ふだんの学部の授業が、受講する学生たちの将来の学校教員としての「授業づくり」の参考となるという点に注目して協議する場を設けること。二つは、学部と大学院の教員が、学生・院生たちにどんな学校教員になって欲しいのかをイメージすることとそのイメージを共有しながら教育改善に取り組むこと、そしてこのことを学部だけでなく全学の教職教育に拡充すること。

#### （2）授業アンケートについて（有家雄介）

有家先生には台湾からオンラインで参加していただきました。

アンケート結果の経年変化において、1（学習時間）が減少していること、9（質問のしやすさ）が向上していること、が指摘されましたが、その原因としては対面授業が増えたことが理由の一つとして考えられるとのことでした。

またアンケートの回答率が減少傾向にある点については、授業中に回答時間を設けることや回

答率の高い学部や教員の取り組みを参考にしたいとのことでした。

なお、学生からの意見として、特に新入生は本アンケート自体になじみがないようだということ、学習時間については多めに回答している場合があること、各授業の内容に沿った質問を用意して欲しいこと、などが紹介されました。

### (3) 学生FD委員会シンポジウムについて (新田佑夏)

学生生活の質の改善・向上に役立てるために、学部生 834 名へのアンケートを行い、159 名から回答を得たそうです。以下、その要望とセミナーにおける質疑の内容を抜粋して紹介します。

#### ① 履修について

- ・必修の科目については事前に登録してあるといい。
- ・履修方法や単位取得状況などがわかりやすいように表にしてあるといい。  
(新年度から小専科目の履修方法が変わることについて松井教務委員長より説明がありました。)

#### ② 施設利用について

- ・文系棟や生協の wifi 環境を整えてほしい。コンセントを増やしてほしい。  
(学長裁量経費として要望を提出している旨、学部長から説明がありました。)
- ・理系棟以外にも学習スペースをもっと設けてほしい。

#### ③ 教育実習について

- ・オリエンテーションで先輩の話を聞きたい。  
(実習先の選択については昨年度から学生たちの希望を優先しているとの回答が日吉教育実習指導委員長からありました。)

### (4) FD 講演会について (高谷哲也)

ベストティーチャー賞受賞のお二人の先生にご講演いただいた FD 講演会でしたが、その報告は高谷先生が本報告書内に書いていらっしゃいます。

片岡美華先生 (障害児教育) が挙げていらっしゃる 4 年間に教えるべき 3 つの力—「調べる力」「活用力」「アレンジ力」—や学生が子どもの見取りができるようにすることという目標の話、そして講演の機会が自身の授業観 (「多面的・多角的に考えるための仕掛け」) をつくること、「五感を通した学び」) を振り返ることになったというお話が特に印象に残りました。

浅野陽樹先生 (技術教育) についての報告では、浅野先生が理論として学ぶ事と活用する機会との接続を重視しているということ、「自ら学ぼうとするマインド」を身につけてもらいたいとの思いを語っていらっしゃったということ、そして授業の全体像をつかむための構造図を示していらっしゃるということが特に印象に残っています。

ファシリテーターの高谷先生が最後に整理された 3 点は以下の通りです。

- ・将来教員になる学生を対象としている中で、知識の獲得に留まらない学習の提供が重視されている。
- ・15 回の授業でカバーしきれない「身につけてもらいたい専門性」に対して、どのように軽重をつけて実現し具体化しようとしているかが紹介されていた。
- ・評価の方法が多様に工夫されている。

### (5) 各種アンケートについて (上谷順三郎)

大学 IR コンソーシアム学生調査結果 (令和 4 年度実施分) の分析について、授業・学生生活に

関するアンケート（教育学部令和5年度前期）と関連づけて報告しました。前者については本報告書の末尾に掲載します。詳しくはそちらをご覧ください。

ここでは、複数のアンケート結果をもとに総合的に考察すべきこと、学生FD委員会シンポジウムや教育改善セミナーを通して本委員会の取り組みについての成果や課題を学生・教員で共有していくこと、回答率を向上させること、を次年度への課題として特に記しておきます。

#### （6） 教師教育開発センターと教育学部との連携について（有倉巳幸）

教師教育開発センターが令和6年度に設置されるにあたり、当センター長となる有倉先生から資料をもとに説明がありました（資料参照）。特に教育学部においては附属教育実践総合センターとの関係をもとに全学の教職教育の機能強化・拡充の方向性が示されました。

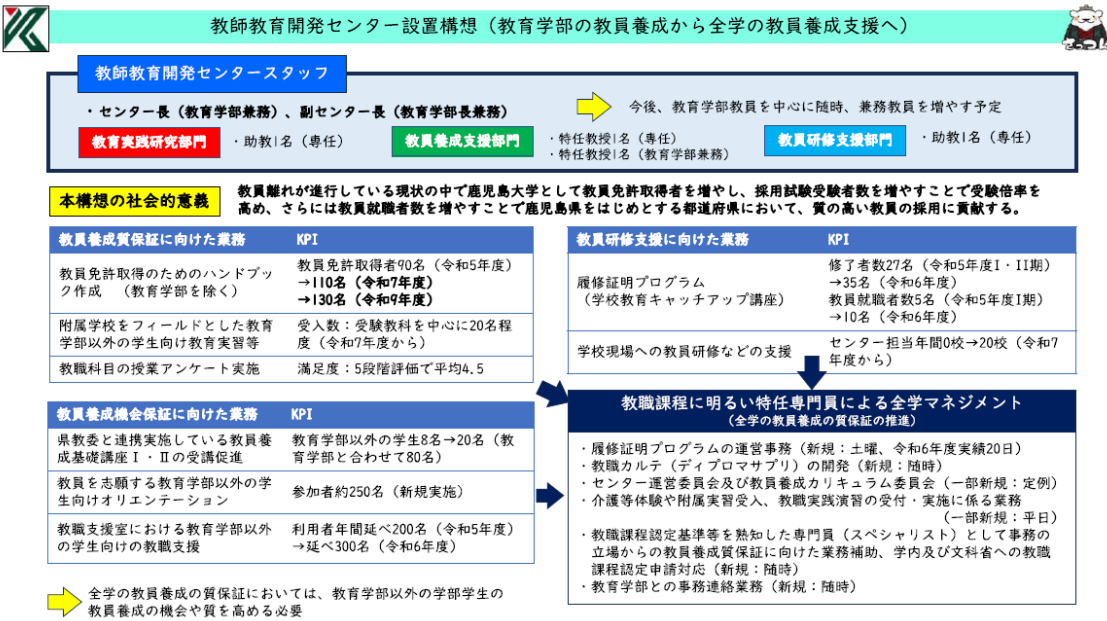
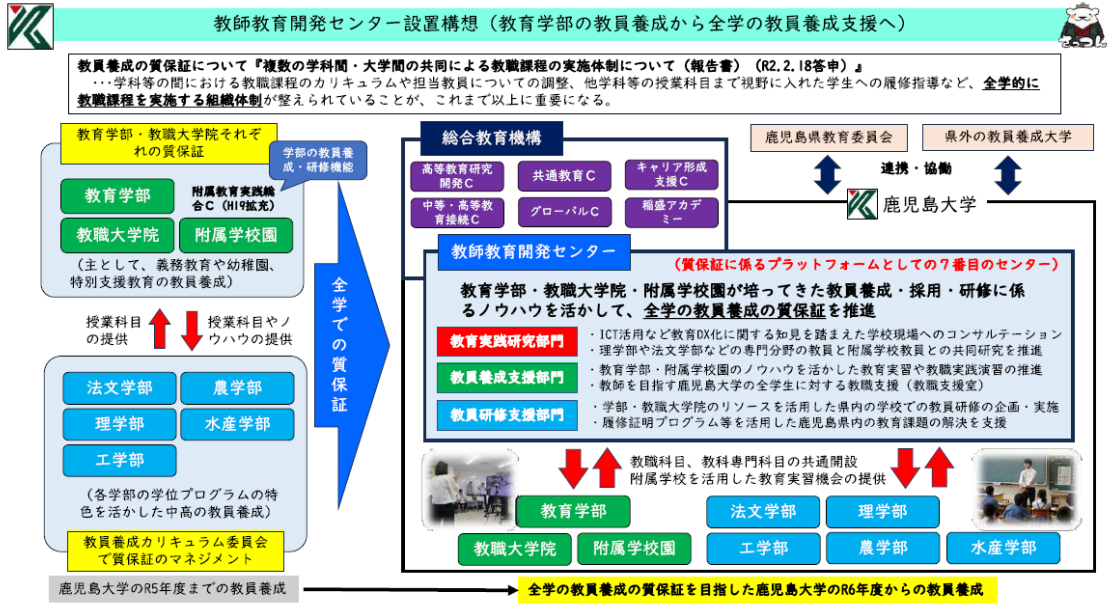
なお、教育学部学生にとっての新センターのメリットや学部教育のレベルアップなどについても視野に入れて新センターの具体化を図るべきことなどが質疑において指摘されました。

当日配付の資料を（7）のあとに掲載します。

#### （7） セミナーのまとめ（土田理）

土田先生からは、学部生・院生、学部教員、学校教員、社会のそれぞれが思い描く教員像・学校像にずれがあるのではないかとのご指摘がありました。また教育学部として取り組むべきこととして、5年先、10年先を見据えたプロジェクトを設けること、FD講演会などに教員関係者以外のマスコミ、行政、民間の方を講師として招くこと、などが提案されました。

(6) の資料



6章 令和5年度専任教員のFD参加率

合計参加率		100 % (専任教員 78 名中 78 名 参加)
企画別 参加率	前期授業アンケート	90 % (専任教員 78 名中 73 名 参加)
	後期授業アンケート	90 % (専任教員 78 名中 70 名 参加)
	前後期授業紹介	18 % (専任教員 78 名中 14 名 参加)
	教育学部 FD 講演会	32 % (専任教員 78 名中 25 名 参加)
	学生 FD 委員会 FD シンポジウム	15 % (専任教員 78 名中 12 名 参加)
	教育改善セミナー	27 % (専任教員 78 名中 21 名 参加)
備考 授業アンケート前期は学部授業なし5名、後期は学部授業なし8名ということで実質100%です。		
FD 講演会には、他に、事務職員4名の参加があった。 <span style="float: right;">学生</span> FD 委員会シンポジウムには、他に、事務職員1名の参加があった。 教育改善セミナーには、教員 21 名の他に、事務職員5名、他部局教員3名の参加があった。		

## 7章 大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和4年度実施分）の分析について

（ 教育 ） 学部

<p>評価する点</p>	<p>1. 1年生調査及び3年生調査  「2. 大学での学びの実績（4）入学後の能力の変化」において、「L. 文章表現の能力」が3年連続で高数値を示しており、学校教育で求められている「思考力、判断力、表現力等」の育成に大きく関わる能力として望ましい状況であり、学士教育としても引き続き重視していきたい。</p> <p>2. 1年生調査  （1）「3. 英語運用能力の熟達度（3）入学時、1年生、3年生の英語運用能力熟達度の比較」において、1年生ではいれずれの能力も入学時よりレベルが上がっており、大学での英語学習に一定効果が認められる。  （2）「5. 大学生活に対する意識（3）大学教育に対する満足度」において、教育学部1年生では「J. 多様な考え方を認め合う雰囲気」が70%（全体56%）と高い点が評価できる。この状況を卒業時まで維持できるよう、教員側も工夫していくことが重要である。</p> <p>3. 3年生調査  「2. 大学での学びの実態（1）授業を通じた学習経験」において、「E. 学生自身が文献や資料を調べる」「H. 学生が自分の考えや研究を発表する」「I. 授業中に学生同士が議論をする」の項目において高い回答をしている点は、大学での学びに求められる学生自身による学習経験が提供できていると評価できる。特に「I. 授業中に学生同士が議論をする」は3年連続で高い数値を示しており、対話的な学びや協働的な学びなど、学校教育で求められている授業づくりが教育学部の授業においても具現化されている例として引き続き注目していきたい。</p>
<p>課題と考える点  （3点以上）</p>	<p>課題①3年生の「2. 大学での学びの実態（1）授業を通じた学習経験」において、「L. 取りたい授業を履修できなかった」が高い数値を示している。また同じく3年生の「5. 大学生活に対する意識（3）大学教育に対する満足度」において、「C. 授業の全体的な質」が全学で最も低い数値を示している。</p> <p>課題②「2. 大学での学びの実態（3）週あたりの活動時間」において、「D. オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する」時間が少ない。</p> <p>課題③3年生の「5. 大学生活に対する意識（4）大学設備に対する満足度」において、「実験室の整備や器具」「コンピュータの設備や施設」がどちらも3年連続で低い数値を示している。</p> <p>課題④本アンケート回答率が1年生、3年生のどちらにおいても低い。</p> <p>課題⑤「3. 英語運用能力の習熟度」について、外国語（英語）教育の効果を測る上でその運用能力にのみ焦点を当てている。</p> <p>課題⑥本調査分析の報告において、課題と考える点を3点以上挙げる事が条件となっている。</p>

<p>課題への 具体的な対応案</p>	<p>①昨年度より数値的には改善されているが、その実態の分析とカリキュラム改革が求められる。今年度は、1月に開催される学生FDシンポジウム並びに2月の教育改善セミナーにおいて、学生・教員両方による意見交換を行い、次年度へ向けた具体的な改善策を用意する予定である。</p> <p>②他方、「5. 大学生活に対する意識（1）大学への適応度」では「E. 大学教員と顔見知りになる」の数値が高く、オフィスアワーよりも充実した関係性が構築されている可能性があり、今後はその具体的な内容に着目し、より充実した関係を目指していきたい。</p> <p>③アンケート結果をどのように受け止め、どのように対応していくのかについて、①に記した学生FDシンポジウムや教育改善セミナーを通して検討し、次年度以降への改善につなげたい。</p> <p>④このことは調査結果の考察にも影響を与えかねない。本学部と他学部とアンケート調査の実態を比較・分析するとともに、回答率の高い学部における工夫点を参考とした改善を図る必要がある。</p> <p>⑤外国語（英語）教育担当者及び学生を対象に、教育の効果として測るべき点について調査・検討し、より全体としてその教育的効果を測ることのできる調査にしてほしい。</p> <p>⑥調査研究として考えた場合、3点以上挙げることが条件とされる点に研究倫理上の問題があると考え。ご検討願いたい。</p>
<p>昨年度挙げた 改善・対応策 による成果</p>	<p>昨年課題として掲げていた項目、「取りたい授業を履修登録できなかった」や「授業全体の質」について、数値的には改善傾向にあるが、抜本的な改革が必要であろう。年度内に学生からの意見聴取、学生と教員との意見交換を行い（学生FDシンポジウム、教育改善セミナー）、具体的な改善策とその計画を立てていきたい。</p>
<p>以前の結果や他の 調査結果・データ 等との比較を通じ て明らかになった 点や気付いた点</p>	<p>以前との比較については上記参照。</p>



## 編集後記

「学生 FD 委員会シンポジウム」と「授業改善セミナー」を軸とした委員会活動を行いました。学生と教職員の交流によって、授業アンケートや授業参観等、従来行ってきた活動を見直し改善策を検討する機会となりました。令和6年度からは教師教育開発センターが開設されます。教育学部附属教育実践総合センターや教職大学院との連携について、本委員会活動においてもその協議の機会を設けることができたらと考えています。

継続すべき検討課題は、本委員会の位置付けです。全学 FD 委員会との関係、学部内の他委員会との関係、そして上に挙げた教師教育開発センター・教職大学院・教育学部附属教育実践総合センターとの連携など「教育改善」をめぐる課題として取り組んでいきたいと思えます。(上谷)

昨年度から引き続き、授業アンケートの実施と集計を担当しました。授業アンケートの回答率は昨年度と比べて若干良くなりましたが、もう少し高くすることができるのではないかと考えています。私自身は、授業時間中に解答してもらう時間を取れなかったため、授業中にアンケートに回答するようお願いするだけでしたが、それで大体回答率は50%ほどでした。それだけでも大分回答率は違ってくると思えますので、次年度以降もご協力よろしくお願いたします。(有家)

今年度久し振りに教育改善委員を務めさせていただいた。教育改善委員になると否応なしに自分の授業について考えざるを得なくなる。自分としては、平素受講生に分かり易く授業するように心がけているつもりであった。しかし、教育改善委員会で授業紹介・授業参観を担当し、他の先生方の授業を見せていただくと、自分の思いもつかない工夫をされていることに気づく。知らず知らずのうちに自分が「井の中の蛙」になっていることを知り、愕然としてしまう日々であった。強く授業改善を意識して授業を工夫しなければ、授業は担当者の独りよがりなものに陥る危険性があることを委員になって思い知らされた次第である。

次年度は、私にとって最後の年になる。有終の美が飾れる自信はないが、少しでも学生が理解しやすい授業に取り組みたいと考えている。この委員を今年度務めさせていただいたのは、上谷委員長や他の委員の先生方、西元総務係長、総務係内野さんのおかげです。衷心より御礼申し上げます。(日隈)

今年度から、教育改善委員として学生 FD 委員会を担当し、26名の学生委員と共に FD シンポジウムや学生交流イベント、ピアサポートなど企画・実施に携わりました。近年は、新型コロナウイルスの影響により学生生活に制限がかけられ、人と人との交流の機会が少なくなってしまう状況が続きましたが、令和5年度は、学生 FD 委員会活動をコロナ禍以前の状態にほぼ戻すことができました。この FD 委員会を担当することによって、学生が困難に感じていることや不便に思っていることなどを直接的に知る機会となりました。よりよい大学生活を送られるようにするために何をすべきか、工夫や改善策を学生と共に考えていくことの大切さを一層実感した1年間でした。(今)

FD 委員 2 年目を務め、1 年目に続き FD 講演会の企画を担当しました。今年度はベストティーチャー賞を受賞された先生にご自身の実践上のこだわりや思い、工夫を紹介いただきました。このような、互いの実践上の思いや工夫について知り合ったり交流したりする機会は日々の業務に追われる中ではなかなか持ちづらく、FD 活動としてそのような場・機会を設定していくことの意義を強く実感しました。それは、授業技術を参考にするとか、優れた実践に学ぶという意味ではなく、お互いに教育実践上大切にしていることを知り合う・理解し合うこと、尊重し合うこと、それを基盤に共に学生に提供する質の高い学習機会とは何かを考えること。そのような機会としての意義・価値でした。高等教育の本質と必ずしも一致しない指標や要求のもとで成果を出すことが課せられている時代だからこそ、教育と研究の専門家である我々が自律的に本当の価値を共に追究する営みがますます重要になっていると感じました。(高谷)

この1年間、教務委員会からの出向という形で教育改善委員会の活動に関わらせていただきましたが、普段の学生指導では気付かなかったいろいろな事を教えていただき、実りの多い1年間でした。特に学生 FD シンポジウムに参加して、学生さんが授業や教育実習をはじめ、大学生活をどのように感じているのか等、教員として教えられることが多く、非常に参考になりました。ひとつ気になりましたのは、シンポジウムで学生さんから出された要望のうち何点かは、何年か前に自分が FD 委員であった際に学生さんから出された要望と全く同じであったということです。つまり改善できていないということです。要望が何年も変わらない項目をどう取り扱うのか、教員側も今いちど考える必要があると思います。例えば、出された要望の中には物理的に問題解消が困難と思われる内容も見受けられます。おそらく教員側はその都度「今後検討する」という回答で受け流してきたものと推察しますが、何年も同じ要望が続く項目のうち改善自体が無理なものは事前に明示するなどして、毎年毎年意見だけは聞くが改善への着手自体をしない、といったことを繰り返さずに済むよう工夫することが大切ではないでしょうか。(丹羽)